

茅風



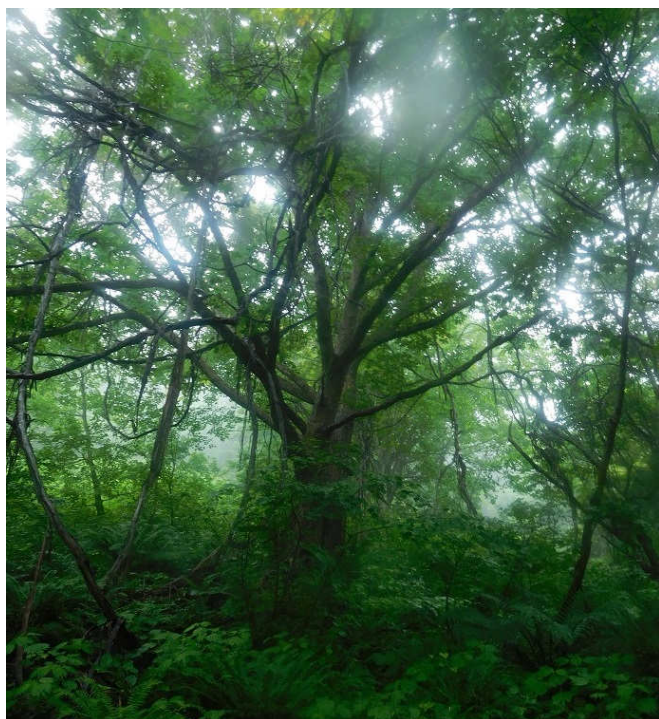
= Breeze from the field of thatch-grass =

2019年9月30日

森林塾青水

事務局便り

茅風通信58号



ミズナラの大木 7月撮影

■ 6月～9月の活動報告(事務局).....	1
■ 麗澤中学校樹木観察会.....	2
◆開催報告(草野 洋)	
■ 2019 定例活動②.....	3
「新緑の中の歩道づくりと腐葉土散布」	
◆開催報告(草野 洋)	
■ 楽習会(下流圏会員親睦プログラム).....	4
「本多静六博士と渋沢栄一翁の功績を訪ねて」	
◇開催報告(稲 貴夫)	
◆塾長の感想(草野 洋)	
■ 2019 定例活動③.....	6
「防火帯刈払・自然環境モニタリング」	
◇開催報告(草野 洋、西村 大志)	
■ 2019 定例活動④.....	8
「ヘルスツーリズムの森林づくりと伐採」	
◆開催報告(草野 洋)	
■ 藤原現地事務所報告(北山 郁人).....	9
「明川 桜の里」	
■ リレー投稿・第三回.....	10
「年を重ねて……」(林部 良治)	
■ 野守のつぶやき(清水 英毅).....	11
編集後記	(敬称略)

【6月】

- 1日、2日 一般参加プログラム(定例活動)2019②「歩道づくりと腐葉土散布」実施。12名参加(うち初参加会友2、会友1)、交流会は新規オープンの「居酒屋パル」にて実施。
- 15日、16日 楽習会(下流圏会員親睦プログラム)にて、公園の父、本多静六の地、久喜市ほかを訪問。会員8名+案内役の小林会友が参加。
- 22日、東京大手町にて、自伐型林業推進フォーラム開催。北山塾頭も役場エコパーク推進室のメンバーとともに参加。
- 22日、23日 東京新宿にて、全国草原再生ネットワーク総会および「草原100選・東伊豆サミットを語る会」開催。主催者側の笹岡顧問のほか、草野塾長、浅川会員が参加。

【7月】

- 13日、14日 一般参加プログラム2019③「防火帯整備・自然環境モニタリング」実施。会員10、会友2合計12人参加(うち日帰り1名)。茅葺文化協会の上野氏が、茅葺職人塩沢氏を伴って来られ、懇親会にて葺き方や茅の違いなどレクチャーしていただく。
- 14日 茅葺文化協会上野理事と「ふるさと文化

財の森」をめぐり打合せ。

- 16日 私立武蔵高等学校中学校2年生総勢174名がみなかみ林間学校に来訪、そのうち43名が先生2名とともに、上ノ原で体験学習。北山塾頭、清水顧問が案内。

【8月】

- 22日 群馬県森林環境部環境局よりの調査依頼に基づき、上の原でのレッドデータブック改訂に係る調査開始。(みなかみ町阿部利夫氏が従事)
- みなかみ町がSDGs未来都市に選定される。SDGs(持続可能な開発目標)は、2015年の国連サミットで採択された国際的な目標。未来都市選定は今年度が2年目で全国31団体のひとつ。

【9月】

- 7日、8日 一般参加プログラム2019④「ヘルスツーリズム歩道づくりと伐採」実施。会員11、会友5名が参加。600年の伝統があると言われる諏訪神社の獅子舞は担い手不足で今年は中止。
- 22日、23日 楽習会(下流圏会員親睦プログラム)にて、上野村森林セラピーに参加。次号で詳報(以上)

麗澤中学校樹木観察会

「五感を使って樹木観察 麗澤中1年生」

報告 草野 洋

五月晴の5月18日、千葉県柏市にある麗澤学園中学校1年生の樹木観察会を行いました。今年の新1年生は4クラス、153名。入学して初めての中間テストを終わってホッとした気分の中です。

協力いただくインストラクターは青水の会員を含め15名で、7名は1週間前にキャンパスを下見して、インストラクションのやり方を検討してこの日に臨みました。

麗澤中の樹木観察のインストラクションのポイントは「五感を使う」こと。「五感」とは「視覚」「味覚」「触覚」「嗅覚」「聴覚」のことですが、これをキャンパスの樹木や自然観察をしながら体験させます。

視覚は樹木、花、虫、土壌などを目でみることで、これが観察の大部分です。

味覚は、葉や花蜜などを口に入れてみなければなりませんが、今の子供たちには抵抗があります。もちろん、何でもかんでも口に入れさせられません。触覚は木の肌などに触れさせることですがこれもなぜか直ぐにはできません。嗅覚は、花や葉っぱの良い香りは問題なくても、ドクダミや土の臭いは躊躇しておっかなびっくり。難しいのは聴覚、聞こうとすれば風にそよぐ葉の音、虫の羽音、鳥の声などですが、これを聞き取れる子は感覚がすでに鋭いといってもいい。樹木の肌に耳をくっつけると、梢を渡る風の音(水があがる音ではない)が聞こえるはず、生徒達に、五感を使って観察しながら「ほかの大事な感覚を使おう」と呼びかけてみました。

見たもの、きいたもの、味わったものがなぜそうなのだろう。他との違いはなんだろう、これからどうなるのだろう



と思いを巡らすことで五感で感じたものが生きてくる。見えても見えない、聞いていても聞けない状態のままにしない。五感を使った樹木観察をアカメガシワ(写真・左)

で再現してみましょう。

- 視覚** : ① 若い葉が赤い色している
② よく見ると葉の上をアリがたむろしている
③ 葉柄が長い

これらから次のことを考えさせる

- ・葉が赤いのはなぜ？
- ・赤い葉で光合成はできるか(少し上級)
- ・アリは何をしている？
- ・葉柄が長いことのメリットは？

味覚 : 若い葉を食べさせてみる(山菜のひとつ)

- ・味はないが柔らかい

触覚 : 赤い葉に触らせる

- ・ザラザラした毛がある これは何？ 何のためにある？

聴覚 : 耳を澄ませて長い葉柄で揺れる葉の音を聞かせる

- ・サラサラという葉が揺れる音が聞こえる
- ・なぜ揺れ易いようにしている？

嗅覚 : 葉っぱをもんで嗅がせる

- ・さわやかな香りがする。何の香り何だろう？

五感を使いながら知覚、つまり「考えさせる」まで誘導してパイオニア樹種である アカメガシワの成長戦略を説明する。

早く成長しなければならないパイオニア樹種にとっては葉は光合成をする大事な部分。毛(星状毛)はおいしい若葉を食べる虫を除け、まだ未熟な葉の組織を強い紫外線から守っている。

葉には蜜線があり、アリを呼び寄せて、毛虫などを捕獲させている。

長い葉柄は葉が重ならず光を浴びられる。また風に揺れやすく、葉の裏の二酸化炭素を入れ替え吸収をたすけている。

このようにパイオニア樹種の生存戦略を通して森林遷移まで説明することもできるし、葉を食器や食物をつつむのに使った人間の暮らしとの関係まで説明が可能である。

麗澤学園のキャンパスは広大で東京ドームの10倍の広さのなかに多様でたくさんの樹木や草花、灌木から大木まであり自然豊か。ミニ森林もあって森林土壌が存在しミニ森林生態系も存在しています。したがって、微生物、土壌動物などの分解者、それを捕食する小動物、鳥類がいてミニ森林生態系が出来ている。蛇やトカゲも見られる、明治神宮の森のようにオオタカがいてもおかしくない。



朝下見の時に
見た蛇「ヒバカリ」(体長20cm
の大人)
かまれたらその
日限りで死ぬと
いうので名前が
ついたようだが
毒蛇ではない。

動物や鳥や風が運んだと思われる樹木があちこちに見られ、稚樹のそばには母樹があり、自然のダイナミックで繊細な動きが感じられる。五感を使ってこのことが感じられるようになってほしい。でもことは簡単ではない、ニッケイを食べない、林の中に入りたがらない、虫に触れない、土壌を手に乗せようとするとひっこめる子がいる。それでも段々と抵抗がなくなり進んで土に触り、葉っぱの分解の様子やそれを営む虫を見つけて手で慈しむ

子が出てきたり、教室に帰り、振り返りの時間に観察で集めた葉っぱなどをイラスト風に張ったグループも出てきたのはうれしい。



教室での振り返りと、生徒たちの作品
葉の特徴をとらえたユニークな作品も登場

今年のキャンパスはエゴノキ、ホオノキなどの花が良く見えて、それを訪れる昆虫が多くてとても助かった。



エゴノキの清楚な花 たくさんのハナバチが訪花していた



めったに見られないホオノキの花（雌雄異熟の雄花の状態）
この付近には高貴な香りが漂う

種も大きなプロペラ状のメグスリノキやカエデ、イヌシデの種が見られて風で飛ぶ仕組みも説明しやすかった。その仕上げラワンの模型でのタネ飛ばしであり、ストーリー性のあるインストラクションをすることが出来た。



ラワンの種の模型を輪ゴムで飛ばすと、回転しながら風に流され舞い落ちる

2019 定例活動②

「新緑の中の歩道づくりと腐葉土散布」

報告 草野 洋

6月1日、2日、野焼きに続く本年度二回目の定例活動には12名が参加した。

6月の上ノ原は、ススキが全面を覆い野焼きの跡もわからなくなる。その中にワラビが顔を出している。それを目当てにワラビ狩りの来訪者が多い。この日も広場には10台近い車と草原の中を動く人影が目立つ。後背地のミズナラ林は新緑がまぶしい。上ノ原が大好きであるが、体調の関係で参加できない伊賀さんが「まるで青虫のはらわたの中にいるみたい」とのつぶやきは絶妙な表現である。

今回の作業は、昨年9月に途中まで作った歩道を延長すること、もう一つは、広場の西側の斜面のススキの成長を促すために周囲のミズナラ林から落ち葉（腐葉土）を運び出して散布する作業である。この斜面はなぜかほかの場所に比べてススキの背丈が低く細い。道路に近く、比較的平坦で作業がしやすいことからすすきがよく刈り取られる場所でもある。刈取りが続くと地上部が持ち出される収奪により栄養分が不足する。やせた土地に生育するススキでも収奪が続くと栄養不足になるのではないかと。肥料散布をもできるが化学肥料には抵抗がある。林縁部や灌木があるところのススキの成長が良いことから発想して、試しに落ち葉を撒いてみることにした。



参加者の女性陣にミズナラ林でお落ち葉を掻き寄せ土嚢袋に詰めてもらい（写真・右）、男性陣がそれを運び散布する（写真・右下）。「おばあ達は山で柴刈り、おじい達は、運んで撒く」である。

考えてみると、昔の農業は里山から落ち葉や草





落ち葉を撒いた成長促進試験地

スキの土壤環境が変わること、落ち葉の中の埋没種や雑草の種が競争相手となること、などであるが、今回は完全な腐葉土でなくまだ分解前の落ち葉を撒いたので一緒に運ばれた土壤生物や菌類がじっくりと分解してくれるだろうから環境の急激な変化は避けられるだろう。落ち葉掻きしたところの環境も変わるのでひょっとしたらキノコや珍しい植物が出てくるかも。

本来なら、試験設計をきちんと作り散布量の違いと生育の関係の分析が必要だろうが今回は試行である。効果があるかどうかは定性的にわかればよい。2時間半の作業で約 120m² (36 坪)に散布が終わった。

余った時間を利用して、「ははその泉」から「木馬道」を散策。今年の上ノ原はタニウツギがまだ蕾で季節が遅いようであるがウワミズザクラ(写真・上)とトチノキが花盛りであった。



この日の宿は「奈倉」、ご主人の朴訥な人柄と自採りの山菜料理が魅力の宿。この夜もたくさんの山菜や手作りこんにゃく、奥様の豊富な経験からの山菜や料理の解説で楽しませていただいた。

そして、この夜は、車座講座・交流会を開店間もない「居酒屋パル」で行った。店主の久保さんの藤原移住までのいきさつや藤原への想いを聞



を運び畑や田んぼに入れて肥料にしていた。今回はそれをススキ草原に施肥するという伝統農法ではないだろうか。もちろんリスクもある。肥沃を好まないス

キの土壤環境が変わること、落ち葉の中の埋没種や雑草の種が競争相手となること、などであるが、今回は完全な腐葉土でなくまだ分解前の落ち葉を撒いたので一緒に運ばれた土壤生物や菌類がじっくりと分解してくれるだろうから環境の急激な変化は避けられるだろう。落ち葉掻きしたところの環境も変わるのでひょっとしたらキノコや珍しい植物が出てくるかも。

本来なら、試験設計をきちんと作り散布量の違いと生育の関係の分析が必要だろうが今回は試行である。効果があるかどうかは定性的にわかればよい。2時間半の作業で約 120m² (36 坪)に散布が終わった。

余った時間を利用して、「ははその泉」から「木馬道」を散策。今年の上ノ原はタニウツギがまだ蕾で季節が遅いようであるがウワミズザクラ(写真・上)とトチノキが花盛りであった。

この日の宿は「奈倉」、ご主人の朴訥な人柄と自採りの山菜料理が魅力の宿。この夜もたくさんの山菜や手作りこんにゃく、奥様の豊富な経験からの山菜や料理の解説で楽しませていただいた。

そして、この夜は、車座講座・交流会を開店間もない「居酒屋パル」で行った。店主の久保さんの藤原移住までのいきさつや藤原への想いを聞

きながら、賑やかかな一夜を過ごした(写真・上)。

2日目は、歩道の延長作業(写真・左)。これまで何度も経験した作業とあって参加者の段取りは手慣れたもの。横

木を伐り、杭を造り、必要などころには階段を造り、地面をならす。この歩道は、将来、森林セラピーの散策路として活用する計画であり、それを考慮して今回、丸太を並べた座観場所も作っておいた。これは10月の麗澤学園のFWで使ってみよう。

作業終了後、林齢が高い森の「青虫のはらわたの中」を散策、ホウノキの白い大きな花も見ることができた。

昼食は奈倉のカレー、ご主人の手作りこんにゃく、今朝わざわざ採りに行っていただいたミズ(ウワバミソウ)のお土産がうれしい。

下流圏会員親睦楽習会

「日本の林学・公園の父本多静六博士と
資本主義の父渋沢栄一翁の功績を訪ねて」
報告 稲 貴夫

今年度からの新企画、下流圏会員親睦楽習会。その第一回は「日本の林学・公園の父本多静六博士と資本主義の父渋沢栄一翁の功績を訪ねて」と題し、6月15・16日の両日、9名の参加で実施しました。

初日は雨模様の中、9時に久喜駅に集合した参加者は車2台で出発。最初の目的地は、岩槻にある木力館(きりよくかん)」という木の博物館。さっそく大槻忠男館長から説明を受けました。

大槻館長は昭和30年に材木屋に就職、体で覚えた仕事が好きになり、昭和41年に独立して(株)大忠を創業しました。

大槻館長は、人工乾燥は木を殺すので、木材は天然乾燥に限ること。海外では家は地元の大工が建てるのが当たり前。どんな住宅も一律に瑕疵担保10年はおかしいことなど、五感で体得してきた経験をもとに、利害関係の絡んだ業界の問題点も含めてわかりやすく語っていただきました。

その後、車で五分ほどの見学用の家に移動。囲炉裏の周りに腰を降ろし、木の温もりを感じながらのひと時を過ごしました。

続いて、元荒川、古利根川を渡って松伏町へ。松伏町は古利根川と江戸川に挟まれた地域で、間を中川が流れています。通ってきた川は流れが堤防の両端までかかり、水位も高く感じますが、町職員の小林さんによれば、この付近は水害に見舞われてきた歴史があり、いつも通りの流れとのこと。



昼食は、周辺の町からも客がくる人気の蕎麦屋「桂」。名物の鴨汁蕎麦は、濃厚なつけ汁と薄切りの鴨肉がよく合って美味しかったです。

県営緑の丘公園の脇を通り、農協の直売所で買い物をしてから、東北道・圏央道・関越道と高速を乗り継いで一路秩父へ。

夕方、秩父神社に到着すると、ようやく雨も小降りになり、拝殿前でお参りした後、神職さんより説明をいただきました。左甚五郎作と伝える彫刻の施された重文の御社殿は、今年の7月より5年計画で彫刻等の修理保存作業が始まるということです。(写真・右)



その後は、今日宿泊する民宿「展望の宿 すぎな」へ。夕食後の交流会では、草野塾長が秩父神社前の酒屋で求めた秩父錦とフルボディのワインを美味しく頂戴しました。

二日目は、雨上がりの清々しい朝を迎えました。



8時半に宿を出発し、最初に萩原の諏訪神社にある茅葺きの歌舞伎舞台(写真・左)を見学。他に神社の本殿なども茅葺きで、屋根は少し傷んでいます。田舎歌

舞伎が奉納される10月は、大いに賑わうようです。

続いて長瀬経由で道沿いの景色を楽しみながら渋沢栄一記念館のある深谷市へ。途中、「花植木街道」や



「コスモス街道」を通り、トウモロコシ畑やネギ畑が見えたところが深谷市。利根川までほど近い血洗島に澁澤栄一記念館があります。(写真左)

平成29年に上皇皇后両陛下が視察されていますが、明治の初めに宮中での御養蚕が復興される際に、政府中枢に養蚕の



わかる人間がいなかったため、養蚕農家の生まれで、富岡製糸場開設に関わった澁澤が相談役をつとめたとのこと。記念館では解説員に説明をいただいて30分ほど

見学。続いて車で直ぐの中家(なかんち)と呼ばれる澁澤の生家へも足を延ばしました。(写真・前段下)

続いて、今度は麦畑が目立つ下道を通って久喜方面へ。昼食をとった後、最後の目的地、久喜市菖蒲支所庁舎5階の本多静六記念館へ。本多静六の生い立ちと、首掛けイチヨウで有名な日比谷公園をはじめ日本全土に及ぶ業績が、わかりやすく展示されていました。



記念館のある菖蒲支所前の広場では観光協会のイベントが開催

庁舎前の広場で開催されていた観光協会のイベント「アヤメ・ラベンダーフェスティバル」も併せて見学し、内容盛りだくさんの楽習会となりましたが、企画に協力いただきました会友の小林哲也さんに心から感謝申し上げます。

■本多静六博士の功績を訪ねる楽習会に参加して 草野 仁

本多静六博士は、1952年(昭和27年)に85才でお亡くなりになっているので、住む場所は遠く離れているが私は博士と同じ空気をしばらくは吸っていたことになる。

林学の祖として尊敬してやまない博士のことは高校時代「育林」の授業の中で、恩師から「赤松亡国論」の主張者として教えられて、森林や林業への探究心が芽生えた当時の私の脳裏に強烈な印象として残り、いつか博士の功績に触れてみたいと思っていて、今回それが実現した。



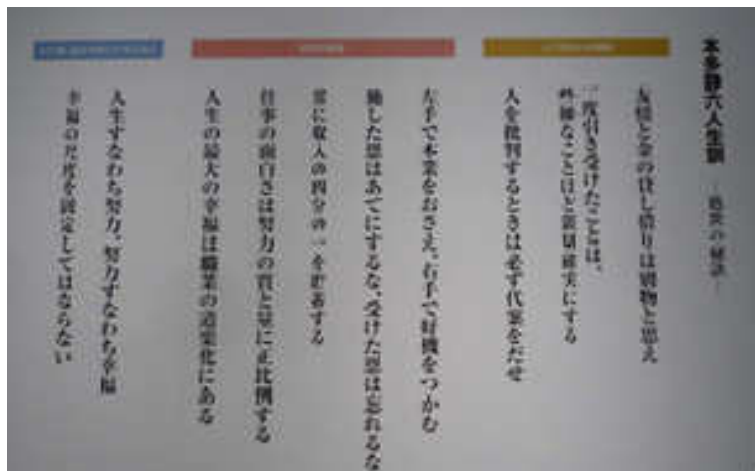
本多静六博士

「赤松亡国論」は本当の論文名は「我国地力ノ衰弱と赤松」であるが何時しか歪曲されておどろおどろしいものにされたものの森林・造林施策に対する警鐘であり、その趣旨は森林・林業に携わるものとして現代でも心しておかなければならないものである。

博士は、鉄道林の造成提案などの林学分野ばかりでなく全国(海外)の公園の造成、風景策による地方振興への功績も偉大である。携わった公園設計と風景策は、全国に75箇所に及ぶ。大沼公園(北海道七飯町)、鶴ヶ城公園(福島県会津若松)、敷島公園(群馬県前橋市)、日比谷公園(東京都)、明治神宮の森(東京都)、森林公園と奥秩父(埼玉県秩父市)、懐古園(長野県小諸市)、天竜峡風景利用策(長野県飯田市)、舞鶴公園改良(愛知県名古屋市)、箕面公園(大阪府箕

面市)、六甲山公園設計(兵庫県神戸市)、大濠公園(福岡県福岡市)、湯布院温泉(大分県湯布市)、霧島公園(鹿児島県霧島市)、南山公園(韓国ソウル市)と全国津々浦々にわたり博士の設計で現在の日本の公園風景がある。正に「公園の父」である。

本多静六記念館の写真にもあるように「月給の4分の1天引き貯金」のように財産形成法も有名であるが残された人生訓も敬服するものが多い。



上の写真にあるもの以外でいくつかを紹介したい。

**「あせらず怠らず 長い道を辛抱強く
進んでいくよりほかはない」**

**「人間は活動するところ、そこに必ず新しい
希望が生まれてくる」**

**「もし老人のゆえをもって 安穩怠惰な生活を
送ろうとするならば それは取りも直さず
人生の退歩を意味する」**

**「人は気の持ち方一つで 陽気にもなり陰気にもなり
愉快にも悲しくなるものである」**

今回の学習会は各施設で説明者に恵まれ濃密で有意義なものであった。

2019 定例活動③

**「防火帯刈払 侵入木除去 自然環境モニタリ
ングーヒメシジミとともに**

報告 草野 洋

7月13、14日、来年の野焼きの準備作業である常設防火帯の刈払い、侵入木除去とともに、自然環境モニタリングを行いました。刈払に7名、侵入木除去に3名、自然環境モニタリングに3人がつきました。

暑い時期に防火帯や侵入木除去を行うのは、草や樹木がこの時期までは発芽や葉の展開で昨秋までに貯めたエネルギーを使い、これ以降は、光合成を盛んに行ない次の季節に備えて体内にエネルギーを貯め込み始めるからで、この時季に草刈りや除伐を行うとその後の再生やぼう芽のためにわずかに残ったエネルギーを使い体内に次季のエネルギーを貯めることが出来ず再生力が衰退するからです。

林業ではこの時季に下刈りといって植栽した幼木の刈り出しを行います、これは周りの雑草や灌木

を除去することで植栽木の日当たりを良くして光合成をしやすいようにすると、前述のように周りの雑草木を衰退させ、人のチカラで植栽木の光

の獲得競争を助けるのです。

今年は、新たに電動刈払機が2台増え、齊藤さんの機械持ち込みの助っ人もいれて、7台で周囲の防火帯を刈り払いました。今年は比較的気温が低く助かりましたがそれでも汗びっしょりの作業となります。今日一日で終了すると目算していましたが歩道刈りも行ったため南側の防火帯が一部残ってしまい2日目に電動刈払機で尾島、稲さんの女性2人に30分ほど刈ってもらいました。

私は、十郎太沢沿いの防火帯を担当。刈り始めてすぐに気づいたのは、刈られる草群から一斉に飛び立つヒメシジミの群れが多いこと。機械を止めて観察するとナワシロイチゴの花にヒメシジミの群、それがあちこちにあります。中にはノアザミに群がっている集団もあり、これほどのヒメシジミの群舞は久しぶりです。ここ4、5年見られなくて心配していたのですが発生の周期なのか、気候のせいかわかりませんが見事に復活です。可憐なヒメシジミを写真で堪能下さい。

ナワシロイチゴの花に群がるヒメシジミ(表が青紫色♂ 暗褐色は♀)



ナワシロイチゴは上品な味と香り、彼と彼女の舌鼓が聞こえてきそう



ヒメシジミの幼虫の食草はアザミ類 オオイタドリなど

そういえば、今年はナワシロイチゴが多いように感じます。この植物は日当たりを好むので、防火帯や道路の作設で適した生育環境が増えたのでしょう。その結果ヒメシジミも増えたという生物多様性の連鎖を生んだのではないのでしょうか。そう考えるとナワシロイチゴやアザミを刈ってしまうのはヒメシジミに悪い気がして出来るだけ残すようにしました。

ヒメシジミが群がるナワシロイチゴの花、どんな味だろうとなめてみました。ヒメシジミの可憐な姿にぴったりのとても上品な甘さと香りです。他にもギボウシ、ホタルブクロ、オオウバユリ、シオデ、ミヤマオダマキがあるたびに刈り取らないように慎重に機械を操作するためいつもより時間がかかってしまいました。ついには空想の世界に入り、「上ノ原の棲み心地はどうだい」「伴侶は見つかったかい」「冬はどうやって過ごしているの」など刈りながらヒメシジミとの対話です。安全上はもちろんNGです。

今年の夏の上ノ原、特に様々な草花や昆虫が目につきました。この時季の賑やかさは来てみないと実感できません。



色も鮮やかなノアザミ(左)とギボウシ「貴女はこんな花を」



増えて欲しい山のアスパラ「シオデ」(左)とオオウバユリ



ホタルブクロ(左)とハウチワカエデ(種が飛ぶにはまだ早い)

この後の西村さんの報告にもありますようにセンサーカメラに写った動物も多く、上ノ原の生物多様性の豊かさを実証しています。これもコツコツと15年続けた茅場再生作業の成果でしょう。

この夜の宿は、「たかね」、日本茅葺き文化協会の上野さんと一緒に参加された京都美山町の茅葺き職人の塩澤さんに茅や茅葺きのことを沢山教わりました。塩澤さんは車イスでの生活ですが、障害を克服して茅葺き職人を続けておられる情熱あふれる方でした。

今年の茅刈りは、上ノ原着手15周年とふるさと文化財の森指定記念の茅刈イベントを企画します。8月には実施内容を明らかにします。みなさん、是非参加して盛り上げて下さい。

2日目は、残りの刈り払いを30分ほどで終了して、来年の事業として計画している、ヘルスツーリズムを意識しながらミズナラ林を散策しました。



この森は、途中、本降りになった雨にもほとんど濡れないほどの壮齢で様々な樹種が比較的大きな木があり心身のリフレッシュには最適です。

■自然環境モニタリング—草原の賑わいを実感

西村 大志

草原の簡易的なモニタリング調査として、上ノ原のシンボルであるヒメシジミ、7月に咲くアザミ類、外来種のヒメジョオンの個体数調査を3人で行いました。1時間位かけてメインの通路沿いを歩いて、周辺に見られる対象種の数を地道に数える方法です。結果としてヒメシジミはなんと663個体、アザミ類は140個体、ヒメジョオンは19個体が見られました。ヒメシジミが乱舞している様子は見ればわかりますが、実際に数えてみるとその多さに改めて驚きました。梅雨の間の晴れ間だったこともあるかもしれません。



エコパークに関するモニタリング調査のために日本自然保護協会が設置している自動撮影カメラのデータの回収を行いました。ニホンカモシカ、ニホンジカ、ツキノワグマ、ニホンザル、ニホンノウサギ、ニホンアナグマ、キツネ、タヌキ、ホンドテンなどが写っていました。日中は見ることのほとんどない生き物も写っていて、上ノ原の草原や森林が多くの動物達に利用されていることがわかります。



センサーカメラに映ったニホンシカ

ニホンジカは数年前までは上ノ原には来ないかとも思われていましたが、今回の調査では少くない体数が撮影されていました。今後はシカ対策も考えないといけないかもしれません。



ツキノワグマ

2019 定例活動④

「ヘルスツーリズムの森林づくり ー遊歩道貫通・樹名板の取り付けー」 報告 草野 洋

例年の9月の定例活動は、諏訪神社の例祭に併せて実施するミズナラ林整備である。今年は、諏訪神社のお祭りは獅子舞の奉納が取りやめとなったので、いつものお祭りへの参加はなし。



邯鄲が 鳴いて茅場が 鈴を振る

この時季の上ノ原は、まだ夏の日差しであるが涼風が吹き、ススキが赤みがかった穂を出して、オミナエシ、ヤマハギ、ツルリンドウなどの秋の草花が咲き、虫の音が聞こえる。中でも邯鄲の声心地よく、まるで草々が鈴を振っているようである。



オミナエシと(左)ツルリンドウ

今回の作業は、ミズナラ林北側のゴルフ場コースに隣接する壮齢林内に作設済の搬出路兼散策路と6月の活動で作った散策路をつないで草原から壮



ノアザミとヒョウモンチョウ

齢林の散策コースを完成させることである。参加者は、首都圏からの15名(うち日帰り2名)と現地から北山さんが参加、参加者が道づくりになれたことや、比較的緩やかな斜面で、横木の設置が余り必要でないこともあり、木漏れ日の射すさわやかな空間のなかでの作業は思ったよりはかどった。3時半頃には前回の歩道の終点に到達して、これで貫通である。



歩道づくりは慣れたもの
(上) ミズナラを伐採して
必要な横木を得る(左)

残りの時間は、座観場所の設置。前回丸太を四角に並べて作っておいだのを利用してみると座り心地が悪い。その代わりに散策路の斜面上部にミズナラを倒して一列に並べるような座観場所を作った。いわゆる倒木座観である(写真・上)。みんなで一列に座ってみるとなかなかよい。

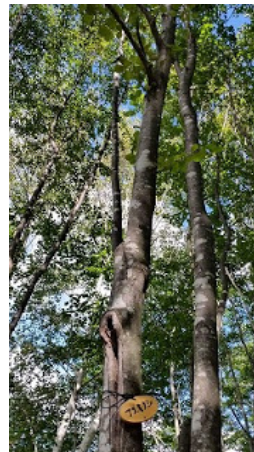


これで森林ヘルスツーリズムを実施する基礎ができた。このヘルスツーリズムの森を仮称「ゆるぶの森」*としているので、完成した散策コースの名称は「ゆるぶコース」が有力。 *「ゆるぶ」は古語で、緩やかになる、和らぐの意

この日の宿は関ヶ原、夕食後、はす向かいにある「居酒屋パル」で車座講座・交流会を行った。車座講座の話題は、神奈川県で林業従事者ガイダンス講座を受けた藤岡貴司さんに体験談を語ってもらった。

2日目は、「ゆるぶコース」の樹木に樹名板を取り付ける作業である。既に樹名が記載された板を手分けして持って、散策路のそばの樹木に次々と取り付けていく。

ここで、藤岡さんがスマホできれいに撮ってくれた樹名板を取り付けた樹木の中で主なものをラインアップ



右上:クリ 右中:ホオノキ
右下:ハウチワカエデ
左上:アヅキナシ 左下:カ
ツラ

《最後に森の中で見つけた秋の果実を紹介します》



ヤマブドウ

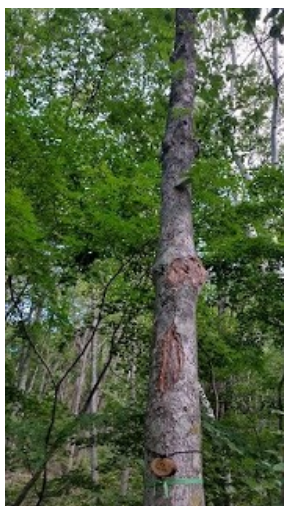


ハリギリ(センノキ)

ムシカリ
(オオカ
メノキ)



ミヤマガ
マズミの
実に秋の
気配



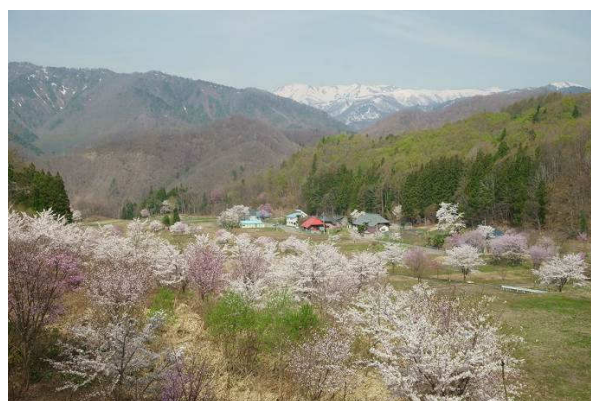
ミズキ



ツタウルシ(三出複
葉の葉)

藤原現地事務所報告 「明川桜の里」 北山 郁人

藤原の明川地区では、2007 年から利根川源流の桃源郷を目指し、地元の人を中心に毎年少しずつ桜を



植樹し、現在では1,200 本もの桜が咲き誇る「明川桜の里」になりました。オオヤマザクラを中心に、15 種類の桜が4 月下旬から5 月中旬にかけて咲き誇り、5 月には花見をしながら、田植えを楽しむこともできる素敵な集落です。

しかし、高齢化により、草刈りなどの管理ができなくなってきました。そこで、みなかみ町のまちづくり協議会水



ウダイカンバ



ブナ

ブナのところまで行って本日の作業は終了。その後関ヶ原でお祭りのお赤飯をいただき、諏訪神社に参拝して帰路についた。

上支部の支部長で、ペンションモグハウスのオーナーの山崎健次さんの声掛けにより、「明川桜の里」の草刈活動を行いました。アウトドア事業者、宿泊施設の方々も参加



除草剤を使うと…

り、草刈が大変になると除草剤が多用されてしまう現実もあります。ホタルが減ってきている原因のとして、街灯が明るくなり過ぎた事と、除草剤の使用だと言われています。ユネスコエコパークへ道のりは長い。

今年、農林水産省が全国の棚田の保全活動を支援する目的で、「棚田カード」というものを作りました。明川桜の里もこのカードで紹介されています。配布はみなかみ町観光協会で行っています。



リレー投稿・第三回 「歳を重ねて・・・」

林部 良治

15年前、元上司でもあった当時の清水塾長から会計担当を依頼されたのか、やれよと命令されたのか、当時のことはよく覚えておりませんが、軽い気持ちで引き受けたのが運の尽きで、まさかそれから15年間も会計を担当すると思いませんでした。

当時私は50台半ばでしたが、今では古希を過ぎ、そろそろ終活の準備をする中で1番気掛かりなことは会計監事の引継ぎでした。預金通帳・印鑑を管理し、沢山の領収書を預かる中で、自分1人だけが分かっている妻は勿論何もわからなく、万一の時の処理を考えると不安が募るばかりでした。

そんな理由で無理をお願いして今期から会計監事の交代をお願いしました。

元号も平成から令和になり、結果的にグットタイミングになったと思っています。

今までご協力・ご支援頂きました皆様にお礼申し上げます。

唐突ですが、「笑点」風の「人生の差」を紹介し

1. 人生につまずくのが18才、小石につまずくのが81才

2. 恋に溺れるのが18才、風呂で溺れるのが81才

3. 道路を暴走するのが18才、逆走するのが81才

4. 知らないことが多いのが18才、忘れたことが多いのが81才

5. 恋で胸を詰まらせるのが18才、餅で喉を詰まらせるのが81才

6. 東京オリンピックに出たいと思うのが18才、東京オリンピックまで生きて思うのが81才

7. 自分探しの旅をしているのが18才、出掛けたまま分からなくなって、皆が探しているのが81才



笑点が当たりました！

やはり歳を重ねると一番欲しいのは若さですね。それにしても月日が経つのが早いですね。

一年一年が早いと感じるのは、NHKの「チコちゃんに叱られる！」によると、「人生にトキメキがなくなったから！」だそうです。

生活の中に、トキメキを感じる機会が多いか少ないかによって、過ぎた時間が長かったか短かったかを感じたが違って来るそうで、19才位から早く感じるようになるそうです。

毎日をボーと生きているとチコちゃんに叱られますので、何事にも興味をもち、気持ちはワクワク感をもって過ごしていければと思う今日この頃です。



東京駅地下のNHK ショップで

林部会員は青水の草創期より、15年に渡り会計を担当されました。大変ユニークなご寄稿をありがとうございました。(編集子)

■野守のつづやき(17) ～ あっちでもこっちでも「飲水思源」！

●台湾の大学生に「飲水思源」を学ぶ 7月16日

東京の中高生対象の教育旅行受け入れのお手伝いでホテルサンバードに2連泊。台湾の高雄大学・観光学科からのトレーニーさん達(写真→)と「飲水思源」について語る機会に恵まれた。台湾では全員、小学校で学ぶ機会があって①水を飲んだらその起源を忘れない②果物を食べたら樹木に感謝③ご飯を食べたら農家に感謝④教育を受けたら両親の恩を忘れない、と教わった由。



①②は承知していたが、③④は日頃忘れがちであったと反省。あらためて、この世に生み落としてくれた両親と育んでくれた大地・自然に感謝せねば、と思った。トレーニーさん達とサンバードさん、ありがとうございました。

●記念手拭い「飲水思源」オンパレード 7月～9月



4月に一斉配布させてもらった上ノ原15周年記念手拭い。あちこちでご活用いただき嬉しい限り。写真左は、既に紹介した民宿「吉野屋」さんのフロントの暖簾がわり？

小生の地元の親友・西ヶ谷さんはご自宅の居間兼書斎に飾って下さっている(→)。十郎太の沢水水が大好きで、ご夫婦そろって青水塾ファン。



左は物産直売所でいつもお世話になっている阿部典子さん。早速、お手製のキャップにしてご着用いただいていた。又、写真は手元にないが、尾島幹事もお手製のそれをご着用に及んでいたと耳にし、秋の茅刈り大会には皆さん整列の上、お揃いでお被りなさってと思った次第。皆さま、如何？

ついでながら、左は拙宅の台所と玄関廊下の間仕切り。



●父は「医食同源」、息子は何故か「飲水思源」 8月

次は、小生かかりつけの歯科医院での出会い。写真(右上)は、その勝沼歯科医院の2019年版スタッフ決意表明ポスター。左上は医院長さんらしく「医食同源」。その右は長男坊歯科医師のそれで、なんと「飲水思



源」！ どういう思いでこの決意に至ったのか。どのような背景・関係性があったのか。あらめてお尋ねしてみたいもの。

●海の守り人たちもまた「飲水思源」仲間 8月3日

今年も恒例の船橋港「サンセットクルージング」に参加、潮の香を存分に浴びてきた。主催者団体・BPAの大野会長は「魚が獲れるのは川とその先に



つながる森の恵みのお陰」が口癖。三番瀬の保全に傾注してきた海の守り人たちもまた、「飲水思源」の仲間なのだ。あらためて、エールを送りたい。

●“ふるさと文化財の森”と「飲水思源」

今春、我らが上ノ原「入会の森」が文化庁「ふるさと文化財の森」に登録された。実に喜ばしいこと。

本制度創設直後の2006年4月、文化庁担当調査官を井上幹事と共に訪ね、ヒアリング方々「森だけでなく草原も！」とアピールしたことを懐かしく思い出した。



思へば、実に多くの皆様方のお世話になった。熱心に町遊休地の利用を勧奨いただいた木村さん、広川さん(初代塾頭)。茅の買上げと利用にご理解・協働をいただいた町田社長。野焼き・茅刈りのご指導・参画をいただいた地元の諸先輩。塾の諸先達の皆さま方。“現代版入会”という井戸を掘って下さった大恩決して忘るまじ、とあらためて思うもの。

美しき風来て萩と遊びおり 中田みづほ

令和元年 白露 (青)

～編集後記～

『茅風通信』第58号をお届けします。

6月の楽習会では、東は松伏町から西は秩父市と、埼玉県を横断しながら楽しく学んできました。いつも埼玉県は通過するばかりで、じっくり見て歩く機会は殆どありませんでした。しかし、実際に訪ねてみると思いがけない発見が多々あり、平地を走る車窓からの風景も変化に富んでいて、つくづく「日本は広い」と思いました。9月に実施した上野村での楽習会も、非常に刺激的で有意義な行事となりました。詳細は次号で報告しますが、これからも流域各地に活動の輪を広げていければと思います。(稲)